人間♂の妖狐♀な俺。

雨流　光希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
人間♂の妖狐♀な俺。

【Ｎコード】
Ｎ５４６３ＢＡ

【作者名】
雨流　光希

【あらすじ】
蔵山家のものには１５歳になると力に目覚めるものがいる。
１５歳になった俺にもとある力が身についた。
目覚めた力は強大だったが、強大な力を振るうためにはあれにならないといけなくて。

プロローグ―自己紹介―（前書き）

一人称視点の方がやりやすい。

プロローグ－自己紹介－

まずは自己紹介をしようか。
名前は蔵山紅（くらやまこう）
名前でわかる様に日本人だ。
家族構成は、祖父、両親、俺、妹の五人家族。
身長は１７２センチ。体重は普通。
髪の色は薄い金。染めてる訳ではないので不良ではない。残念ながら地毛だ。
髪とは違い瞳の色は黒なので、ハーフとも間違えられる。
顔立ちは妹いわく整っている方だとの事だが、身内の評価なので、俺自身としては受け入れていない。
また目つきは悪いらしく小さい子には泣かれたこともある。中々ショックだった。
これも身内評価だが、顔のわりに俺と接した子供は俺とまた遊びたいというらしい。
歳は１８歳になったばかり、素質が合った為、家業を手伝っている。
高校には行っていない。高校に行く間も惜しんで働いている。
両親、祖父共に健在だが、それなりに収入があるので、１kのアパートで一人暮らしだ。家を出る時には散々妹に引き止められたけど、親戚と折り合いが悪かったので仕方ない。
一人暮らしと言っても、引き止めに失敗した妹が頻繁に訪ねてくるので、そこまで自由を満喫出来てないのが現状だ。油断してるといつのまにか妹は部屋にいる。
ブラコンの気があるのかも知れないと心配になるが、基本はやりたいようにさせている。

さて、家業についても説明しよう。
家業を表す言葉にぴったりな言葉は非現実的、もしくは妄想、空想、

嘘といったところか、我が蔵山家は妖魔関係の仕事をしている。
主に妖魔退治を生業にしているが、まれに仲裁や鎮魂などの依頼もある。

何を馬鹿な事を言っているんだと思うかも知れないが、事実だから仕方ない。
この世には人ならざる者が実際に存在している。メジャーなもので説明すると神隠しは本当にあるし、河童も実在する。しかも河童には集落がある。
まあ、俺も力に目覚めるまでは、信じていなかったんだけどな。
幽霊、妖怪、神、悪魔なんだそれ？とか思ってたくちだ。

力と言われてもピンとこないだろうから、力についても説明しておこう。これが先程言った俺にある素質だ。蔵山の血を引いている者の中には、望むと望まないとに関わらず、１５歳の誕生日を迎えると特異な力に目覚める者がいる。力の種類は様々なのだが、アニメや小説で出てくるものを頭に浮かべてくれれば大体の能力は蔵山家で発現していると考えてもらえればいい。
俺も見事に力を発現した。しかもハズレとも当たりとも言いにくい力だ。
特異性はぴか一なのだが、それは誇れることでないと俺は思う。
何事も使いやすいほうがいいに決まっている。

参考までに祖父は水を操る力。母は風を操る力。最近１５歳になった妹も母の血を濃く継いだのか風を操る力に目覚めた。
ここ数年は豊作らしく、力に目覚めた者が多いそうだ。一族の中には何か大変な事が起きるのでは？と懸念している者もいるそうだ。

ここまでで厨二病患者が、異能きたとか喜びそうだと思うが、さらに詳しく説明すると祖父と母には二つ名がある。

祖父には水竜、母にはシルフ。
二人共痛々しい二つ名だが、同業者の中では有名らしい。
二つ名を聞いた時には流石に笑った。
祖父の水竜はまだいい。だが４０過ぎたおばさんがシルフだ。シルフの後に笑いとかつけていいと思う。その事を母に話したら、気づいたら地面に転がっていた。母の逆鱗に触れ気絶させられたのだが、これは苦い思い出だ。
シルフや水竜のような二つ名は欲しいとは思わないが、祖父、母の力には俺が１５歳で力に目覚めたときから憧れていた。
それと同時に蔵山の血を怨んだ事もあった。
なんで俺の力はこんなのだろうと。
つまり何が言いたいかと言うと、どうせ目覚めるなら祖父や母や妹みたいな力が欲しかったと言う事だ。

稼業は嫌いではない。
むしろ人外の者との繋がりが出来たりするのは正直嬉しい。
この前、ハーフヴァンパイアの少女を助けた時には良い思いをしたしな。
柔らかな唇の感触を思い出すと、思わずにやけてしまう。もちろん頬にだが。
その事を話したら父には羨ましがられ、妹は一週間口を聞いてくれなくなったが、ささいな事だ。

俺はこの仕事が大好きだ。死の危険は少ないながらもあるが、子供の頃に憧れたヒーローを地で出来るのも大きいし、妖魔とのハーフには美女が多いしな。

不満があるのは俺自身の能力についてだ。四大は全て使える。これは俺の能力の長所。

四大とは、空気・火・水・土のことだ。
力に目覚めた際には、神童、蔵山の麒麟児、初代の再来などと持てはやされた。四大すべてを使えたのは蔵山家初代当主だけだった。
当時の資料によると美しい女性で、５８歳で死ぬまで見た目は十代に見えたらしい。俺も同じ様に生きていく事になるかも知れない。
いつまでも若く生きられたら良いなという願望でもある。

次は短所を話そう。
四大を扱える事によって時期当主確実と周りは思い取り入ろうとする親戚達がうざかったのはよく覚えている。だが、そんな状態は三ヶ月も続かなかった。
この短所は解決したと言って良いだろう。

この問題を解決したのは俺自信だった。一年に一度ある力の披露をする場で、俺は意図的に力を抑えて使っていた。それにより当然だが力の威力が低かった。それを見た親戚達は、こいつには当主は務まらんと自然と離れていった。
ここで疑問に思うだろう。
何故力を全力で使わないのか。使えないのでは無く、使わない。
これが俺が自分の力に不満を持っている最大の理由なんだが聞いて驚くなよ。
そして引かないでくれると嬉しい。

では心して聞いてくれ。
俺が全力で力を使用しない理由を。
俺が全力で力を振るうと、姿が変わる。
髪は腰まで伸び、同じ薄い金色の九つのふさふさした尻尾の生えた者に。
耳も生えてくるというおまけ付きだがここまでは我慢できる範囲だ。
先程述べたようにハーフヴァンパイや、人狼など人型を留めつつ身

体を変化させる種族は結構いるのだ。

だが、俺の姿が変わるのはそういう種族とは異なる。言ってしまえば言葉通り次元が違うのだ。

俺の姿は妖狐になる。しかも美少女な妖狐だ。

身長は１５０センチまで縮み、胸と尻はそれなりのもので、腰はきゅっと細い。

全力で力を使うと変身するため、一応自分の意思で変身はできるのだが、いつ戻れるかはランダムという極めて厄介な性質だ。

初めて変身した時は一週間もそのままだった。耳や尻尾は消せたのだが、その一週間家族の対応にだいぶ困った。

いつも厳しい祖父の反応が一番ひどかった。１６０センチと小柄ながらも、白髪をオールバック。見る者を怯えさせる眼力、身体にいくつもの傷跡を持つ水竜の二つ名を持っている猛者。

「じーじって呼んでもいいんじゃぞ」

笑顔でいっていた祖父の顔は今でも忘れない。

普段は本当に笑わない祖父のとろける様な表情は軽くホラーだった。

さらに妹はひたすら俺をいじってきた。

女物の服を嫌がる俺に無理やり着せたり、ランジェリーショップに買い物に付き合わされたり、仕舞いには俺にブラを付けさせようとしたり、本当にひどかった。

思い出すだけで軽く涙目になれる…。

さらに言うと風呂とかトイレとか女性慣れしてない俺にとっては苦行以外の何事でもない。

自分の身体見て鼻血を出すことになるとは思わなかったよ。

だが変身によって俺の力はかなり強まる為、あまり邪険にもできな

いのが現実だが。

これで俺の事はだいたいわかってくれたと思う。
そんな訳で人間♂の妖狐♀な俺に依頼を出してくれると主に生活面で助かるのでよろしく頼む。
ちなみに彼女に立候補してくれる子も探しているので、気が向いたら連絡よろしく。
これにて自己紹介終わり。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5463ba/

人間♂の妖狐♀な俺。

2012年1月14日23時58分発行